

かのえなぎさ

NAGISA KANOE • PRESENTS

天野瑰

KAI AMANO • ILLUSTRATION

優

しい
シナリオ

傲慢



「常盤さんっ……」力強く突き上げられ、朋樹と深い部分で一つになる。隆が首にしがみつく、ゆっくりと律動が刻まれ、内奥を丹念に擦られ始める。「あっ、あっ、あぁっ」控えめに声を上げながら、隆は短時間でしどけなく乱れる。



傲慢で優しいシナリオ

《立読み版》

かのえ なぎさ

イラスト 天野 瑰

愛想のない奴だと、常盤隆は煙草を啜とぎわりゆうえたまま、目の前の青年をじつと見つめる。一方の青年も臆おそすることなく、背筋を伸ばして隆を見つめ返してくる。

津川朋樹は、深い黒が印象的な少し怖い目をしていて、それに唇は寡黙さの表れか、真一文字に引き結ばれている。売り出し中の俳優だと言われれば素直に信用してしまいそうな、男らしく整った顔立ちをしているのだが、やはり隆が感じるのは、愛想のない奴だということだ。

履歴書には二十四歳と記載されているが、それにしても妙に落ち着いている。いや、落ち着きすぎている。今年三十一歳になる隆にも、ここまでの落ち着きはない。

朋樹から向けられる真つ直ぐな眼差しが神経に障さわるのは、完全に隆の八つ当たりだ。ここ三日ほどまともに眠っていないので、とにかく機嫌が悪いという自覚はあった。

「――灰」

隆が質問を発する前に、初めて朋樹のほうから口を開く。わけがわからず、隆は目を細める。ここで自分が仕事用の眼鏡をかけたままなのに気づき、乱暴に外す。そのとき、啜とぎえた煙草の先が目に入った。今にも灰が落ちそうだ。

これか、と思いながら隆は煙草を灰皿で揉み消す。ついでに、投げ置いたままだった朋樹の履歴書を

取り上げ、写真と実物の朋樹を交互に見る。

何か印象が違うと感じていたが、よく観察すると、実物の朋樹はよく日に焼けた肌をしていた。

一日中デスクにかじりついている隆に比べれば、なんとも健康的な肌色だ。

「……この写真を撮ってから、ずいぶん日焼けしたな」

遊び歩いていたのか——、と隆は意地悪なことを言うつもりだったが、朋樹の答えは素っ気ない。

「バイト、してたんで……。道路工事のバイトで、きついですけど、金はいいから」

慎重に言葉を選んでいるのか、朋樹の話し方はゆっくりとしている。聞いているともどかしさにイライラしてくるのを隆は感じる。おそらく持っているテンポが合わないのだ。隆は忙しさが身に染みついているのか、とにかくせっかちで、早口だと指摘されることもある。

睡眠不足が限界近くまできているのか、頭まで痛み始めてくる。隆はこめかみを揉んでから、吐き気がするほど甘ったるいコーヒーを飲む。体に悪い眠気覚ました。

「仕事をしていたらいきなり、これを読めとプロットが書かれた紙を渡されたんだ」

隆は履歴書に続いて、細かな字がびっしりと書かれた用紙数枚を取り上げると、自分の前でヒラヒラと揺らしてみせる。

「悪くないと答えたら、今度は君に引き合わされた。……このプロット、君が？」

「はい」

やはり隆の目をじっと見つめてきながら、朋樹が頷く。隆はため息をつき、デスクに片肘をつく。

「……あの人の魂胆が見えたぞ」

「あの人？」

隆は横目で朋樹を見る。朋樹の問いかけには答えず、反対に問い返した。

「どんな仕事でもやるか？」

軽く目を見開いてから、朋樹は返事をした。

「はい」

「他の脚本家の世話になったことは？」

「ないです」

「シナリオスクールには通っているのか？」

「今は行ってないです」

「シナリオスクールで作るコネも、バカにはできないぞ」

思わず余計なことを言った隆はすぐに我に返り、顔をしかめてから再びコーヒーを飲む。

二人の間に沈黙が流れるが、だからといって静寂に包まれるわけではない。なんといっても、周囲が騒々しすぎる。隆は再び無意識にこめかみに指先を這わせながら、室内を軽く見回す。

ここはテレビ番組の制作会社で、テレビ局から発注を受けて番組を作るのが仕事だ。ドラマ作りが主で、そのドラマで高い評価を得ている。

隆と朋樹が向き合って話しているのは、その制作会社内にある企画部の隅に置かれた古いソファセットだ。ドラマ制作で有名な会社ということもあり、脚本家志望が頻繁ひんぱんに脚本や、その脚本の基もととなるプロットを持ち込んでくる。そんな彼らと面接するのが、ここだ。

だいたいプロデューサーかディレクターが話を聞いたり、持ち込まれたものに目を通す。もっとも、そこに行き着くまでがなかなか大変だ。忙しい人間揃いなので、まともに脚本やプロットを手に取るのも稀まれだ。

隆はフリーの脚本家だが、昔からこの制作会社と関わりが深く、育ててもらったという意識もある。それについて二年前には、この制作会社と組んで、ヒットと呼ばれるドラマも作り出した。以来隆は、脚本家としての仕事に困らなくなった。若手の中では恵まれた境遇だ。

だからこそ、三日もこの会社の会議室に缶詰めにされても、文句も言わず脚本を書き続けている。それがいきなり会議室から引きずり出され、プロットを読まされたあとに、朋樹と面接してやってくれと言われたのだ。

知るか、と吐き捨てて、このまま席を立つてもいいのだが――。

隆はコーヒーを飲み干す。カップの底にはたつぷりと、砂糖が溜まっていた。意識が朦朧もうろうとして、自分でも何杯入れたのか、よく覚えていなかった。

身震いするほどの甘さに耐えていると、隆のその顔がどんなふうに見えたのか、二人の傍らを歩いてきたベテランの男性スタッフに、心配そうに言われた。

「常盤くん、ひどい顔だよ。また青沼あわぬまくんは無理な注文されて、寝かせてもらってないんだろう」

「……わかりますか」

「とにかくひどい顔色だ。鏡見る余裕もなかったんだろう」

隆は自分の顔に手を這わせる。会議室にこもっている間、人間として荒すまんだ生活を送っていたのは確かだ、自分がどれほどボロボロなのか、気にかけるしなかった。

視線を感じてそちらに顔を向けると、朋樹は変わらず隆を見ている。急に居心地の悪さを感じ、隆は

立ち上がっていた。

「顔洗ってくる。ちょっと待っていてくれ」

そう言い置いてソファから離れ、タオルを手に洗面所に向かう。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

傲慢で優しいシナリオ

《立読み版》

発行日 2011年12月30日

著者名 かのえ なぎさ

イラスト 天野 瑰

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Nagisa Kanoë 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。